

大名美恵子です

〒319-1112 東海村村松 2401-2

電話・FAX 029-284-0761

E-mail toukai@oona-mieko.info

ご存知ですか？東海村文化財保護・活用計画

東海村の歴史・文化の特徴 東海村の成り立ちと歴史

「計画」(2018. 3) より

【成り立ち】 東海村では今から約 1300 万年前から現代までの大地の歴史を地層からみることができます。

その地層の様相や産出される化石から、東海村は今から約数百万年前は深い海の底であったことが分かります。やがて海が退き、村域の大部分が陸地になりました。約 12~13 万年前には古東京湾の一部になって村全体が浅い海底になりましたが、5~6 万年前からは、東海村は完全に陸地になり、広い台地と一段低い広大な海岸低地が広がっていました。

【旧石器時代】 今から約 2 万年ほど前の氷河期には、氷河ができて海水が減り、海水面が現在よりも数百m 以上も低下し、東海村の沖合 20 数km まで低地が広がっていました。白方地区に所在する西光遺跡から、約 3 万 3000 年前~3 万 1000 年前と考えられる石器が出土しており、この頃には既に東海村に人々がいたことが分かっています。この時代を旧石器時代と呼び、石器を用い、狩りをして生活をする人々がいたと考えられています。

【縄文時代~弥生時代】 約 1 万年前になると、地球温暖化により、気温が上がり、氷河期にできた大陸氷河が溶けて海水面が上昇しました。最も暖かかった時期は縄文時代前期と呼ばれる今から約 7,000 年前であり、海拔の低い低地は海となり湾や入り江を形成し、村の北部は豊岡、亀下、竹瓦、石神外宿などの久慈川の低地が入り江となり、東側の真崎浦や細浦、阿漕ヶ浦は太平洋の入り江となって内湾を形成し、現在よりも海が内陸側に入り込んでいたと考えられます。そのような海と川に面した水辺環境は人々が居住地とするのに適しており、人々は水辺環境を臨む台地上にムラを営み始めました。真崎浦・細浦周辺台地上及び久慈川周辺には、縄文時代の貝塚が見られます。また、縄文時代、弥生時代の集落跡を多数確認できます。なかでも、真崎浦右岸の台地上に営まれた縄文時代の環状集落跡である堀米A遺跡からは、汽水域に生息するヤマトシジミや貝刃、多量の石錘(石のおもり)などが出土し、水辺環境が人々に豊富な水産資源をもたらし、ムラ形成に大きな意味を持っていたことが分かります。

(裏側に続きます)



三角形の天冠(てんかん)をつけ、三角板の短甲(たんこう)を思わせる文様が全面にみられ、やや誇張した草摺(くさずり)が裳(も)のように表現されています。

顔には赤味や黒味の着色があり、髪は美豆良(みずら)に結われ、腕には手甲(てっこう)がつけられています。脚以下が欠損していますが、造りはきわめて精巧で、本県を代表する埴輪です。



武人埴輪



絹本著色 聖徳太子絵伝

水辺のムラの風土とそこで生きる人々

【水辺が育んだ生業】 海や川に面した水辺環境は豊かな生業・産業をもたらしました。村内の遺跡からは、様々な漁労の道具が出土し、古代から水辺での漁業を行っていたことが分かります。また中世では久慈川におけるサケ漁、近世では地引網漁や真崎浦や阿漕ヶ浦での漁業が展開されました。久慈川でのサケ漁は現在も行われており、久慈川での漁法が現在も引き継がれています。

村松海岸砂丘内の村松白根遺跡の発掘調査では、中世後半以降の大規模な製塩跡とそれに伴う建物跡、墓坑等が確認されています。これらのことから村松海岸では15世紀～17世紀にかけて、製塩を生業とするムラが形成されていたことが分かりました。また、製塩の道具のほか、多様な生活道具や、煙管などの嗜好具、サイコロなどの遊具、青磁稜花皿や国産陶磁器類が出土しており、佐竹氏や水戸藩にとって重要な財源であった製塩のムラの豊かな生活の様子が伺えます。

また、谷津が複雑に入り組む東海村の地形は、豊富な湧水をもたらし、これらを活かして水田開発が行われてきました。村内各地には人口的な溜池が現存し、湧水や久慈川を利用して稲作が行われてきました。近年では地形を利用して畑作や果樹栽培も盛んに行われ、台地上では干し芋づくりが村の大きな産業の一つになっています。

【信仰と水辺の景観】 海浜地帯は、神々の来臨するような聖地として認識されていたとされ、本村の海浜地帯にも如意輪寺や村松山虚空蔵堂、大神宮、豊受皇大神宮など、歴史の古い社寺が存在します。海岸部には漂着神伝承が伝わっており、平磯海岸の清浄石も神が漂着した聖石とされ、豊受皇大神宮の祭神もこの磯に出現されたという伝承が記録されています。また、大神宮も平磯の巨岩が怪光を発生し、その光が真崎浦をさしたことから奉斎され大同年間（806～808）に平城天皇より「村松五所明神」の神号を受けたと伝えられています。

それに関係し、ヤンサマチとよばれる各村々の氏子が各神社の御銚や御神輿を奉じて平磯海岸の清浄石や酒列磯前神社に神幸した浜降り祭の神事が昭和4年まで行われていました。本村でも大神宮、豊受皇大神宮、須和間の住吉神社、石神外宿の住吉神社が参加し、特に大神宮は、村松海岸を起点として酒列磯前神社に向かって走る競馬の儀を行い、盛大な祭として知られていました。

村松山虚空蔵堂には霊木が村松海岸に漂着し、空海がそれを三分しその一つに虚空蔵尊を刻んで祀ったという伝承があります。虚空蔵尊は、その化身が明星とされ星によって舟の位置を確かめる船乗りや漁民たちから深く信仰されていました。村松山虚空蔵堂には元禄二年に村松沖で難破しそうになった船員達が頭髪を切り銭文の穴に通して釘で打ち付け海に流し村松海岸に漂着した木が「霊験木」として現存しています。

また室町時代以降、海岸沿いである真崎浦や村松の地は景勝地として知られ、特徴ある景観を作り出していました。応仁2年（1468年）には連歌師の宗祇も村松を訪れ、「なむこくさうぼさつ（南無虚空蔵菩薩）」を頭においた10首の歌を詠んでいます。さらに、近世に入ると、徳川斉昭により、水戸八景が選定され、村松の村松晴嵐がその一つとして選ばれており、東海村の水辺環境が美しい景観として人々に認識されていることが分かります。

さらに、近世に入ってから村松山虚空蔵堂にて十三参りという習俗が盛んに行われるようになり、東海村は「十三参りの村」とも呼ばれるようになります。十三参りとは、十三歳になった男女が知恵と福德を授けるといわれる虚空蔵菩薩を祀る寺院に参詣する行事のことであり、現在も多くの人々がこの地を訪れています。

